

平成29年度
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字になおして答えなさい。

- (1) 世界イサンを訪ねる。
- (2) 二人でケンリヨク争いをしている。
- (3) 大会のハウシンを定める。
- (4) 有名な作家のチヨシヨ。
- (5) 和風テイエンのある家。
- (6) 帰国のキヨカをとる。
- (7) カクギの決定を待つ。
- (8) ヒタイの汗をぬぐう。
- (9) 馬が急にアバレ出した。
- (10) 月光にテらし出される。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

*字数制限のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

二〇一一年四月三日陸前高田市を移動中、瓦礫の中に大きなシー

ツがたなびいていました。車を止めて見てみると、自分の安否などが書かれていました。掲示板代わりにシートを使っているようです。

A 私の目の高さにあった言葉が飛び込んできます、^①「けんか七夕を復活させるのは俺だ!」。

「県外の新聞記者の人が、大槌町の避難所でインタビューをしたら、秋の祭りができるか心配」と答える方たちがいて、驚いて「みたい」という話も聞きました。

祭りだけではありません。震災の後、改めて郷土の言葉、風習、食べ物などの文化や歴史を知りたい、そして残し、次世代へのたすきとして途切れさせることなく継承させたいという思いと焦りの声を耳にしました。

大槌町出身の人と話をした時「大槌町は町内会によって出し物もお囃子も違うので、協和しているというより、ぶつかり合って共

鳴している感じ」と言っていました。実際、大槌町には鹿子踊、

神楽、虎舞など、二〇を超える郷土芸能があり、それぞれの地域で

継承されています。震災で山車や衣装が流されてしまったり、人が亡くなったりと存亡の危機にありましたが、地元の人たちが見事に復活させていました。

文化の復興は心の復興だと感じています。そして文化こそ、人間の根っこを形成する土台となるものです。

私がアメリカに留学していた時、大学の近くの町にカンボジアからの難民が多く住む町がありました。当時からカンボジアに関心があった私はその町で、カンボジア人に無料でカウンセリングをしている医師をインターネットで知り、会いに行きました。

医師はタイにあったカンボジア人の難民キャンプで医療ボランティアをしていたこともあり、今でもボランティアで難民キャンプからアメリカに移住してきたカンボジア人のカウンセリングを行っていました。内戦を経験したカンボジア人の中には心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症する人がたくさんいました。夜、子どもの泣き声が聞こえる、死臭がするなど、当時の情景がフラッシュバックするそうです。当時の悲惨な体験のせいですが、外国に移住することで言葉や文化などの壁にあたり、
B 発症しやすくなっているそうです。

② その言葉の壁をカンボジアの子どもたちは持っていませんでした。赤ちゃんの時にアメリカに渡ったり、ここで生まれた子どもたちは、

※
アメリカの小学校に通っているので、英語はネイティブです。がんばれば大学まで行けるので、難民キャンプやカンボジア国内での生活を考えると明るい未来が待っているかのように思われました。しかし、中学校や高校に入ると、不良行為をする子どもたちがいました。カンボジア人の若者同士でつるんでは、器物損壊をはたらいたり、流血沙汰のけんかは日常茶飯事でした。

そのカンボジアの若者たちに話を聞く機会がありました。どうしてもそのような行為に及んでいるかと聞くと、「寂しいから」。続けて③「自分が何者かが分からないから不安だ」という声が上がりました。

英語が話せないのでカンボジアの言葉であるクメール語を話す親。英語しか話せない子ども。英語が話せない親は、夜のビルの清掃や閉店後のレストランでの皿洗いなど、子どもたちが家にいる時間仕事をしています。子どもたちが学校に行く時間に戻ってきて、帰ってきた時にまた出かけていくというすれ違いの生活。

子どもたちは話を続けます。でも自分たちは両親の子どもだという話です。「髪の色も、目の色も、肌の色も、親と一緒に。でも俺はどこが祖国か分からない。自分たちがどこから来たのが分からない。だからどこに行くのかが分からない」

その時に感じたのは「言葉」の大切さ。親と子どもの会話、伝達していくためのツールとしての言葉はあるに越したことはないとい

55

うこと。そして「文化」の大切さです。そしてどれだけアメリカで教育を受ける機会を得ても「自分は誰なのだ」というアイデンティティの部分がしっかりしていないと、微風が吹いただけで倒れてしまふ樹木のようにもろいものなのだと感じたのです。「文化」は人間の中に根をはります。

カンボジアに赴任して絵本の出版をしていた時、アメリカにいるカンボジア人の若者から絵本を売ってもらえないかという問い合わせをもらいました。絵本からクメール語を勉強したいとのこと。民話を主題とした絵本は「カンボジアの文化を知ることができる」ということで希望されていました。昔から語られる民話や説話は、人間の生きる道、善と悪、歴史などを伝えてくれます。

④ 民話や説話といえは、岩手県でも、自分たちの地域に残る伝承を讀みたいと『遠野物語』が讀まれました。また前述したとおり、※ シャンティがアレンジをした語り部の会は、満員御礼。宮沢賢治や石川啄木など、地元出身の詩人の本が手に取られるようになりました。

C その土地に関する本、出身者の本を讀みたいからではなく、その人たちが当時をこの土地でどのように生きてきたのか、どうしてこの土地で生きていこうと決意したのかを知りたい。そういう思いもあるようです。

「この町には縄文時代の貝塚があるんだ。一〇〇〇年に一度の

75

70

65

60

大津波つなみと言われているが、その津波を何度受けてもこの町に住すむことを決めた人間がいた。今回の震災だつて、先人たちのことを思えば、自分たちが町を再建していかねばならないのだ」とまっすぐな瞳ひとみで語ってくれた若者がいました。そのためにも、過去に失ったもの、築き上げたものを見直すためにも、資料を読みみたいと言っていました。

福島県立図書館にお願いして「警戒地区の町村の民俗・文化に関する資料」の一覧を作ってもらいました。一瞬にして故郷に住めなくなる、今でも戻れない大きな惨事さんじ。その街に「存在した」文化について学んでみたいと思ったのです。

「文化」は風俗・言語・食文化など幅広くカバーしているので、調べ始めの手掛かりとして「町史(誌)」「村史(誌)」の民俗編を紹介いただきました。また実際、福島県立図書館に行き、そのリストにあった資料を拝読はいどくしました。『飯館村の民俗』を手にとると、飯館村に残る田踊りの紹介がされていました。同じ村にいくつもの

グループが存在していて、昭和に活動をやめたしまった団体も含め、多くのことが記録されています。田踊りの歌も地域によって異なることも分かりました。つまりその地域の田踊りが活動をやめてしまふと、その歌が継承されなくなります。継ぐ若者がいないなど問題があり致し方ないことかもしれませんが、記録として資料にまとめ

られているので、その歌詞や衣装は後世に伝える記録として残ることになるでしょう。

その資料をまとめるには、それなりの人員と予算と時間が必要だったはず。今回のような震災が起きると、調べることもまとめることもできずに、消滅しょうめつしてしまう伝統文化などがあるのではないでしょうか。

〈中略〉

現在、国立国会図書館や県立図書館が震災資料の収集を行っています。資料や本として残すのはもちろんですが、視聴覚資料も収集・保存が進むことを願ってやみませんし、図書館がその大きな役割を持つ施設しせつとなりえます。

人口の流出は避けられません。それまで伝統文化の活動に携わっていた人たちもバラバラになってしまふ中、衣装を着ていなくてもよいので、踊りなどを録画し集めていかないと地域の文化が残らなくなってしまう、と文化関係者が危機感を募もつらせていました。

長くシャンティの支援しえんをしてくれる東北の方が、震災後の自分の生活を振り返り話してくれた言葉があります。「何力所も、たらいまわしにされた。まさか自分が難民のようになるとは思わなかった。初めてアジアの国の人たちの気持ちがあった」。故郷を離れ、新天地で生活を余儀なくされる方たちが、「我々は誰か」、「どこから

来たのか」と自身の根っこの部分を振り返る時に、それを助ける資料がそばにあってほしいと願います。

(鎌倉幸子『走れ！移動図書館 本でよりそう復興支援』)

※ネイティブ……ここでは、日常生活で最もよく使い、よく理解する言葉。

※シャンティ……筆者が所属している、アジアで子どもたちの教育支援をしている団体の名前。東日本大震災の後は、移動図書館など読書を通じた支援活動を行った。

問一

A

C

記号で答えなさい。

ア、より イ、むしろ ウ、ちょうど エ、ただ

問二

——線①とありますが、この言葉にはこれを書いた人のごのような思いが表れていると筆者は考えていますか。その内容が含まれている一文を探し、最初の五字を書きなさい。

問三

——線②とありますが、「カンボジアの子どもたち」が「言葉の壁」を持たないと言えるのはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

問四 ～～～線 a 「日常茶飯事」、b 「致し方ない」の意味を次か

らそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「日常茶飯事」

ア、毎日の生活における楽しみ イ、ありふれた平凡なこと

ウ、日々の良くない習慣 エ、皆が心配していること

b 「致し方ない」

ア、やむをえない イ、誰も知らない

ウ、とてもくやしい エ、思いもよらない

問五 ——線③とありますが、これを説明したのものとして最も適

当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、両親はアメリカで仕事をすることにしか興味がなく、自分
に構ってくれないことに寂しさを感じている。

イ、難民キャンプやカンボジア国内での生活より恵まれた生活
をしているため、カンボジアを忘れてしまっそうである。

ウ、使う言葉は英語だが姿はカンボジア人であり、そのように
育った自分の背景にわりきれなさを感じている。

エ、アメリカの出身だが英語がわからないために育った環境
になじめず、アメリカを祖国だと思えない。

問六 ——線④とありますが、ここでの岩手県の人々の思いを説

明した次の文の（あ）（う）に入る言葉を本文中からぬき
出し、文を完成させなさい。なお、（う）は最初と最後の五
字を答えなさい。

この岩手県の町には古くから人が住んでいたことを示す（あ

※二字）があるが、何度も（い ※二字）を受けてき
た歴史もある。それでもこの土地に住み続けてきた先人たちが

この土地で（う ※三十五字）

ということを知るために、自分たちの地域に残る伝承について
の資料を読みたい。

問七 ——線⑤とありますが、田踊りなどの文化を資料として後

世に残すことで、その資料がどのような役割を果たすことを
筆者は期待していますか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問八 あなたが生まれ育った国や地域の伝統的な文化（衣食住、伝

統芸能、行事など）を一つ例に挙げ、その文化を知らない人に伝えるつもりで紹介しなさい。また、その文化を後世に伝える方法（本文に書かれている「資料にまとめる」は除く）も考えて書きなさい。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本

文を改変、省略したところがあります。）

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

小学五年生の大窪博士はクラスメイトの福ちゃんや中田サンペイ君たちから「ハカセ君」と呼ばれている。博士は変わったところのあるサンペイ君と仲が良いのだが、サンペイ君は福ちゃんから「うそつき」と思われ嫌われており、またそんなサンペイ君と仲良くする博士のことも、福ちゃんはクラスみんなを巻き込んでのけ者^こにしている。

サンペイ君はもう帰ってしまっていたので、博士はサンペイ君の家に向かった。

離れの部屋にはサンペイ君はいなかった。たぶん川に行ったのだ^Aと思っ^Aて博士はいつものポイントに向かった。はたして、サンペイ君は一人で釣り糸を垂^つれていた。

「やあ、ハカセ君」サンペイ君は後ろ向きのまま言った。

「福ちゃんと仲直りした方がいいと思うよ」博士はいきなり核心に切り込んだ。

①「やつはぼくが気に入らないのだよ。瓢箪池のヌシのことだって、

やつは信じようとしなからね。こっちはおじさんが釣りかけて、糸を切られるのをこの目で見ているのだ。ヌシはぜったいにいるのだ」

「ぼくはクラスのみんなにサンペイ君のこと、a 知ってほしいんだよ。こんなにすごいし、おもしろいのに、みんな全然知らないんだ」

「そんなことはいいのだよ、ハカセ君。ぼくたちは遠くにいくのだから、小さな教室にかかわることはないのだ」

「でも、みんなと仲良くやれた方が、楽しいじゃないか。サンペイ君はおかしい。なんか逃げてるみたいだ」

言ってしまった後で、博士ははっとして口^Bに手を当てた。

② サンペイ君の肩^{かた}が震えていた。水面の浮^うきにアタリが来ているのに、竿^{えお}を動かそうともしない。

博士は話しかけられずに、b 背中を見ていた。

しばらくしてサンペイ君が大きく息を吸い込んだ。

背中を向けたまま、「ハカセ君、帰ってくれたまえよ」と威^{いあつ}圧的に言った。

博士はそのままc 家路についた。

博士は一人きりだった。

相変わらずクラスのみんなとは話せなかったし、サンペイ君も博士と視線が合うのを避^さけていた。だから、学校では一人きり。以前にもまして、たくさんの本を読み、いろいろ考えたり、煮詰^{にっ}まったり。

ぼくがいるべき場所はここじゃない。そんな感覚がよみがえってきて、お腹の中をd 巡^{めぐ}っていた。

それでも、なんとか耐^たえられた。X に耐えることって、

ひよっとするとサンペイ君が博士に教えてくれたちよっとした技術かもしれない。博士は家の近くの川で釣りをすることを覚えたし、自宅の水槽^{すいそう}でタナゴも飼い始めた。友達がいなくても、本と釣り竿があればそれなりに満ち足りていられたのだ。

釣りっていい。辛い^{つら}ことを忘れられる。

③ どうして釣りを始めたのか聞かれたら、たぶん博士はそう答えただろう。

冬だから寒くて、博士は鼻水をたっぷり垂らしながらも、川に出るのはやめなかった。

博士はこんな日が、ずっと続くのを覚悟^{かくご}していた。中学ではさすがにそんなことないだろうけど、小学校の間はこのままなのだ。覚悟すれば、しっかりとした気分^{きぶん}でいられた。

でも、変化^{へんげん}というのはいつも突然だ。二月十四日、バレンタインデーの朝、いつものように登校して教科書を机に移そうとすると、

中からごそりと小さな包みが二つ、三つ落ちた。

最初はなんのことか分からなかったけれど、すぐに理解して博士は顔^{かほ}がかーっと熱くなった。きっと耳たぶの先まで赤かったに違^{ちが}い

ない。

チョコレートなのだ。博士は自慢じゃないけれど、これまでもらったことがなかった。それが今年に限って、いくつももらえるなんて。机の中に手を入れてさぐってみると、最初に落ちたやつだけではない。十個以上はありそうだった。

紙の感触が指先にあつて、博士はそれを引っ張り出した。封筒だった。

「大窪君と中田君はともがんばっていると思います。そんなけいします。女子のみんなからチョコレートをおくります」

視線を上げると、小林委員長がこつちを見て、リスみたい大きな前歯を出して笑っていた。

そういうことだったのか。女子全員が博士のことを励ましてくれたのだった。

「今年は福ちゃんにはなしだって。去年は十個以上もらった。シヨック大きいぜ」

斜め後ろの男子が耳打ちしてきた。えっ？ と耳を疑った。博士にわざわざ話しかけてきたのだ。福ちゃんを見ると確かにうなだれた感じだったけど、それ以上に博士は話しかけられた、という事実戸惑った。

「あたしたちは仲間はずれをつくるような男子にはチョコあげない

70

からね！」小林委員長が大声で言うと、どっと笑いが起きた。

④ クラスを成り立たせている力学がコトリと小さな音を立てて組み替わる。その日から、誰も博士に話しかけるのをためらわなかったし、福ちゃんも謝りこそしなかったけれど、また以前のように博士を扱うようになった。

すべては元通りだった。博士が、サンペイ君と親しくなる前とまったく同じ。サンペイ君は、誰とも話をせず、授業中もただずつと窓の外を見ていた。博士はそのごわごわした後頭部を時々見ては、
⑤ 胸がチクリと痛んだ。

三月になったばかりの昼休み、博士は例によって一人で本を読んでいた。

昼休みが半分過ぎたことを告げるチャイムが鳴った時、廊下をわただしく走る足音が聞こえてきた。

「ハカセ君、急いで来てくれないか」
息を弾ませた声に振り向くと、サンペイ君が教室の入口のところ

に立っていた。

突然のことで驚いたのが一番だったけれど、同時にすごくうれしくて、博士は「いいよ」と立ち上がった。

「とにかく急いで来るのだ。ハカセ君は是非見に来るべきなのだ」
ちよつと高飛車で、なのに憎めない、言葉を交わさなくなる前と

90

80

85

75

まったく同じサンペイ君だった。

後についていく時、サンペイ君の服にあちこち泥どろがついていることに気づいた。

サンペイ君は校舎を出て、まっすぐに瓢箪池に向かった。池のほとりには釣り竿が投げ出されていて、大きなタモ網あみが水の中に半分浸ひたしてあった。泥にまみれた取っ手をむんずと握つかみ、持ち上げると、水が飛び散るのも構わずに大きく振ふって博士の前に差し出した。

博士の目は網の中に吸すい寄せられた。黒っぽい銀色の魚が、木漏れ日を反射しながら力強く身をくねらせていた。

⑥ 「ヌシなのだ。水がぬるんで、やっと釣れたのだ」
いつものように淡々と言おうとしているけど、どことなく声がうわずっていた。

「すごい……」博士はひとこと言って黙だまり込んだ。

本当にすごいと思った。サンペイ君はずっと「ヌシ」のことを話していたけれど、ここまで大きく立派りっぱなものだなんて想像していなかった。

ゲンゴロウブナ。たしか、そうだ。顔の後ろから背びれにかけてこんもりと盛り上がったたくましい形をしていて、なによりも大きかった。たぶん、五十センチ近くはあるんじゃないだろうか。サンペイ君や博士の体の幅はばよりもずっと大きい。

110

105

100

95



サンペイ君は嘘うそをつかない。博士はなんだかじーんとしてしまつて、その場に立ちつくした。遠くで午後の授業が始まる五分前のチャイムが鳴っていたけれど、そのチャイムの意味さえ気がつかなくなつたほどだ。

「さあ、ハカセ君、そろそろいくのだ」

サンペイ君はタモ網を水に戻もどして、服に付いた乾かわいた泥を払はらった。「ねえ、サンペイ君、この魚どうするの」博士は熱のこもつた口調で言った。

「そうだな、放課後まではこうしておくとして、とりあえず飼かつてみるかもしれないな。でも、飼かいきれないなら魚拓ぎょたくを取るのだ。こいつは魚拓を取るのに値あたするのだよ。おじさんが帰かえってきたら見せなければならぬのだ」

「みんなには見せないの」

「なぜ、そんな必要があるのだい。ぼくはヌシを釣かっただけで満足なのだ」

近くに銀色のバケツが転がっていた。博士はそれで池から水をくみ取り、タモ網を上げて中にそいつを落とした。バケツはいかにも小さかったけれど、体を少し丸めるようにしてなんとか収まった。

「なにをするのだね、ハカセ君」

サンペイ君が少し慌あわてた口調で言った。

130

125

120

115

「いいから、いいから」

博士はバケツを持って走り始めた。水がちゃぶちやぶ撥ねて指に触れ、冷たいのになぜか気持ちよかった。

サンペイ君はほら吹きじゃない。本当にすごいんだ。

心の中でつぶやきながら、ぐんぐん走った。こぼれた水は指だけじゃなく、シャツやズボンまで濡らしたけれど、それも気にならなかった。

教室の扉をガタンと開けたのは、午後の授業が始まった瞬間だった。

「大窪、どうした。遅刻だぞ。それにどうした、中田まで——」

柿崎先生の声を無視して、博士は大声を出した。

「ヌシやでー、ヌシが釣れたでー、サンペイ君が釣ったんやでー」

みんながぼかんと口を開けてこっちを見ている。自分が関西弁で話しているのに気づいたけれど、それはどうでもよかった。

「ほら、みんな、見いや。でかいでえ。ほんま、でかいでえ」

「ハカセ君、やめるのだ。ぼくはこんなのは好きじゃないのだ」

そう言いながらも、サンペイ君は本気で止めようとはしなかった。どっちにしたって博士はサンペイ君の願いを聞き入れるつもりなんてなかった。

(川端裕人『今ここにいるぼくらは』)

150

※タモ網……魚をすくい上げるのに用いる柄のついた網。

※魚拓……釣った魚の姿を、墨や絵の具を使って紙などに写すこと。

問一 線A「はたして」、B「はっとして」のこの場面にお

ける意味として最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A「はたして」

ア、あげくの果て

ウ、相変わらず

B「はっとして」

ア、まずいと思って

ウ、よくわからなくて

イ、思ったとおり

エ、思いがけず

イ、びっくりして

エ、かしこまって

140

145

135

問二 ～～～線「いきなり核心に切り込んだ」を四字熟語で表した

場合、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、青天白日
- イ、異口同音
- ウ、我田引水
- エ、単刀直入

問三

a

d

 にあてはまるものを次からそれぞれ選

び、記号で答えなさい。

- ア、ぐるぐると
- イ、とぼとぼと
- ウ、きびきびと
- エ、きつと
- オ、もつと
- カ、じつと

問四 ——線①からは、福ちゃんがサンペイ君のことを嫌ってい

る様子がうかがえますが、では博士はサンペイ君のことをど
のような人物だと思っていると考えられますか。「く人物」
につながるように、本文中から十字でぬき出して答えなさい。

問五 ——線②とありますが、この時のサンペイ君の気持ちとし

てあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、プライドを傷つけられて怒おこっている
- イ、痛いところを突かれてショックを受けている
- ウ、見当ちがいのことを言われてあきれている
- エ、厳しく指摘されて驚き、悲しんでいる

問六

X

 にあてはまる内容を自分で考えて答えなさい。

問七 ——線③とありますが、ここで言う「変化」とはどのよう

なことを指していますか。それを最もよく表している一文を、
ここより後の文から探し、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問八 ——— 線④とありますが、これはどういうことを言っていますか。

すか。それを説明した次の文の [1] [2] [3] [4] にあてはまる人物を、ア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア、博士 イ、サンペイ君
ウ、福ちゃん エ、小林委員長

[1] を中心とした力学で成り立つクラス内において、
[2] と [3] は仲間はずれにされていたが、 [4] の一言がきっかけで [2] は元のようにみんなに受け入れられるようになったこと。

問九 ——— 線⑤とありますが、それはなぜだと考えられますか。

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自分だけのけ者ではなくなり、サンペイ君に対し、後ろめたいような気持ちになったから。

イ、一時の感情でひどいことを言ってしまった、サンペイ君とけんかしたことを後悔したから。

ウ、結局福ちゃんとサンペイ君が仲直りしないことにやりきれない気持ちになったから。

エ、ずっと一人でいるサンペイ君にはかなわないという劣等感を抱いたから。

問十 ——— 線⑥とありますが、この時、サンペイ君はどのような

気持ちでいると考えられますか。三十字以内で説明しなさい。

問十一 本文の☆の部分には、次の一続きの二文がぬけています。

これが入る場所の、直前の六字をぬき出して答えなさい。

博士は小さくため息をついた。サンペイ君はいつもそうだ。

問十二

——線⑦とありますが、それはなぜだと考えられますか。
五十字以内で説明しなさい。

